

基調講演「日本の国立公園の魅力を世界へ」

講師：国立公園満喫プロジェクト 有識者会議座長 東京都市大学特別教授 涌井 史郎

日本の国立公園は大変なポテンシャルを持っており、「この魅力をどう世界に」という大きな課題を有識者会議で担っている。人口変動で日本経済はこのままいくと縮退してしまうという懸念がある中で、経済成長が縮退する原因が生産年齢人口の減少にあるということは明らかで、この根本である超高齢少子化が日本の経済を直撃している。そういった実態の中で、どのような戦略を考えていくのか、というのがそもそもこの背景にあるということを認識する必要があり、日本が持っている自然本体の価値を見いだしながらどのように考えていくべきなのか、という延長線上に観光政策、アジアダイナミズムと連動した観光政策がある。

観光というのは国民や地域がいかに光輝いているのか、他国の人が見てこうということなのかと納得してくれるということである。どうやって地域が光輝いていくのかということを見ると、国土面積の 14.6%が自然公園地域、大変優れた自然が営われている、あるいは風景が展開しているという事実がある。これをしっかり国際観光振興と結びつけていくということが極めて重要な戦略だと考えている。これまでは高度経済成長の中で、ものを言わぬ自然の代理人として自然をしっかり守ってきた環境省だった。国民のモラルが向上したこと、その他を捉えて、あらためて地域に対して光を当て、インバウンドを招へいしていこうという戦略が今明らかになっている。潜在的な観光競争力は、直近では競争力のレベルでいえば世界第 6 位というところまで上昇してきた。インバウンドの期待だが、2020 年までに訪日外国人の国立公園利用者数を 1,000 万人、全体を 6,000 万人という数字が出ている。人数が多いことが必ずしもいいことではない。一番重要なのは体積 = 1 人あたりの観光消費額 × 人数と考えるべきなのではないか。場所によっては、あまり多くの人押しかけてくると非常に多くの貴重な自然が毀損されてしまう。このあたりのバランスをいかに取っていくのが重要だ。「経済政策であれば体積を重視し、貴重な自然を保護する。自然の奥深くに踏み込んでいく人には多くの料金を払ってもらおう」。こういうことによって経済効果を上げるというのが本筋ではないかと、先日の内閣の観光戦略タスクフォースでも申し上げてきた。どうやって 1,000 万人にするのか。1,000 万人にただするのではなく、今申し上げたように経済的な効果をいかに地域に還元し、地域の再生の大きなエンジンにしていくのか、というのが課題だと思う。そのときに考えないといけないことは何かというと、日本らしさにあふれた国立公園の魅力をどういったえかけていくのか、ということだ。魅力的なツアー、あるいは受け入れ体制、あるいは町並み、様々な条件を磨き上げてどのように対応をしていくのか。こういった課題に対して国立公園満喫プロジェクトというものが生まれた。すなわち日本の国立公園のポテンシャルを最大限に引き出すために必要なハード・ソフトの体制をきちっと先駆的に整備する。それをモデル化して、モデルの国立公園を先導役にしながら、その成果を全国展開して日本の国立公園を世界のナショナルパークとしてブランド化していくということが非常に重要だ、というのが国立公園満喫プロジェクトの大きなポイントになる。

年間 490 万人を 2020 年までに 1,000 万人にする。最大の魅力は自然そのもの、非日常の体験を世界の人々に提供できること、最高の自然環境をツーリズムに開放し高品質・高付加価値型のインバウンドの市場を創造すること、風景と野生生物の保護、ツーリズムの好循環をどのように促進していくのか。地域全体で地域の自然を保護し、利用するという気持ちが重要で、豊かな自然と地域の発展の共存という交錯をどのように考えていくのかが大きな課題だと思う。そういう文化が厳しい自然とのせめぎ合いの中でしっかり地域に根付いてきたと考えている。すなわち自然共生の思想。これが郷土への誇りを生み、地域創生の意欲につながり、それが結果として国際化に対応した。それが一番望ましいというのが私の考えているところだ。日本の国立公園はどこに特長があるのか。日本はほとんどは言い切れないが、公有地と民有地の間がカバーしている。当然自然の厳しさに伴った暮らし・ライフスタイルというものが有形無形文化として我々の目に触れたり、あるいは体験することができる。石原環境大臣になってこれでも改善したほうだが、もっと改善してほしいと思う。今日は政務官もいるのでぜひ考えてほしいと思う。

国立公園は近代日本の観光の黎明期をリードしている。このころの国立公園は非常に魅力的で瀬戸内海についてはアジアのエーゲ海という評価があり、クルーズ船が何隻も往復をしたという実態がある。日本には素晴らしい観光資源があり、そこにしっかりと光を当てていこうというところと国立公園制度の誕生は無縁ではなかったと考えていただきたい。暮らしと共にある国立公園というものが 1934 年、昭和 9 年 3 月に瀬戸内海国立公園、雲仙国立公園等 3 箇所が指定され、同年の 12 月に阿寒、大雪、日光、中部山岳、阿蘇、くじゅうが指定され、今日のように 34 箇所の国立公園に成長してきた。満喫プロジェクトの目標は何かというところと、世界水準のナショナルパークを日本に実現しよう。そのブレークスルーとしては質の高い、ホテル誘致、あるいはビジターセンター、自然の資源を向上させるためのあらたな仕組みを導入し、そしてここにもあるように景観の磨き上げということをしながらい国内外に強力な情報発信を通じて 1 つ 1 つをステップアップしていこうということでこうした目標を掲げた。結論からいうと満喫プロジェクトとしていろいろ候補地はあったが、今日報告がある全国 8 箇所を取りあえずグラウンド確立のモデル公認選定の基準、フィルターにして選定をした。ここだけでは終わらせないのが 1 つの考え方だ。それ以外に約 10 箇所、展開事業の採択案件を公募して、10 箇所選定をした。ここでも同じようなプログラムを展開していく。全体について行うのではなく、ある一定の事業の枠組みの中で国立公園満喫プロジェクトとして支援をしていこうという 1 つの大きな流れを作っている。みなさんに関心をぜひ持ってほしい。国立公園の中の集団施設地区だけが国立公園満喫プロジェクトの恩恵を受けるのではなく、国立公園全体、国立公園や都道府県立の自然公園と広域的なネットワークを作りながらどのように観光客が満足するのを考えていく。ハードもソフトも 1 つの考え方。国立公園の中だけに閉じこもって考えるのではなく、超広域的な視点からしっかり考えていきたいと思いますというのが我々の考え方だ。2050 年目標である「living harmony with nature」、自然と共に共生する世界をどのように作っていくのか。こういう目標を考えていとき、日本の国立公園、自然公園は極めて重要なヒントを与えてくれる。単に観光客を 1000 万人超えるまで増やすのではなく、1000 万人の日本の文化の基礎、同時にそれがいかに世界の未来に対して大きな意味を持つのかということについてフィールドで学んで持ち帰ってもらうことが国立公園満喫プロジェクトの大きなテーマだと考えている。今日はそれぞれの地域において、それぞれの成果の話をしてもらえるので、それを楽しみにしている。

